日本ブランド発信事業

「レクチャー＋ワークショップ＋パフォーマンスで伝える『日本の実験音楽』」

訪問国：アルゼンチン、ウルグアイ

実施期間：2016 年 3 月 12 日（土）～21 日（月）

「日本ブランド発信事業」専門家

音楽家／企画編集者　安永哲郎

はじめに

現代日本におけるアート／エンターテインメント・コンテンツは、進化する情報メディアやテクノロジーに下支えされながら、加速度的に国内外での認知を高めている。その一方で日本は、1960 年代頃から実験音楽の領域でも特異な国際的地位を醸成してきた。それらは CD などのパッケージ流通やインターネットの普及とともに拡大し、今や「ONKYO（音響）」「JAPANOISE（日本＋ノイズ）」などとカテゴライズされ、欧米諸国を中心に、世界各地で偏在的に人気を博すグローバル・コンテンツとなっている。

筆者はこれまで、国内外の実験音楽シーンに属しつつ、その発展に寄与することを目的に多様な活動を展開してきた。本報告書では、アルゼンチンとウルグアイにおけるレクチャー／ワークショップ／パフォーマンスの三形態による情報発信を通じた「日本の実験音楽」紹介の記録をレポートする。

写真 1. 現地小学生と実施したワークショップ（ウルグアイ／ヴィジャセラーナ）

1. レクチャーおよびパフォーマンス

日時：2016 年 3 月 13 日（日）
会場：サンマルティン大学実験芸術センター／ UNSAM Centro Experimental de las Artes
出演：安永哲郎＋フェデリコ・デュランド
観客数：102 名

アルゼンチン到着初日は、ブエノスアイレス市内に国立サンマルティン大学が保有する施設「実験芸術センター」にてレクチャーおよびパフォーマンスを行った。

レクチャーの内容は以下の通り：

・自己紹介（創造性研究、音楽家・企画編集者としての実験音楽普及活動）
・「東京の音」の聴き比べ（品川駅プラットフォーム上の雑踏と高尾山の環境音の比較）
・今昔の芸能の見比べ（能舞台とアイドルグループのコンサート映像の比較）
・日本の実験音楽の聴き比べ（大音量ノイズを用いた演奏と微細な音による演奏の比較）
・上記の比較を通した日本の情報環境の多様性と両極性についての解釈
・情報の多様性から生まれる「逸脱」「変異」としての実験音楽の発展
・日本の実験音楽家の事例紹介
・実験音楽の普及を支える情報メディアや店舗の紹介

発表スライドは、動画や音声を多用し、より体感的に日本の情報環境や芸能の状況を知ることができるように配慮して構成した。その結果、筆者の問いかけに積極的に応じたり、内容を熱心にメモする姿が多く見られ、本テーマに対する関心と理解が深まったように感じた。

写真 2. レクチャー中、参加者に問いを投げかける筆者

レクチャーの後、同国コルドバ在住の実験音楽家フェデリコ・デュランド氏を招き、デュオ形態による即興演奏を披露した。デュランド氏とは 2014 年に鎌倉・光明寺で共演したことがある。今回は事前打ち合わせをせず、互いに持ち寄った音具と電子機器を用いて、多様な質感や微細なハーモニーが感じられる瞑想的な演奏を約 40 分間行った。観客には最後まで席を立つことなく、静かに集中して聴いていただくことができた。
終了後は、数十名の観客が舞台を取り囲むように集まり、演奏に用いた音具を興味深く眺めたり写真に収める姿が見られた。筆者も舞台に残り、自然と質疑応答が始まった。「何をイメージしながら音を出しているのか」「日本の風景を表現しているように感じられた」「安穏とした安らぎと心地よい眠気を感じた」など、学生風の男女から初老の男性まで様々な質問や感想が聞かれた。全体的に、日本的な感性と実験音楽との関係性に対する関心を強く感じた。
観客の中には、日本のアニメキャラクターのグッズを身に付けた若者、日本語を学ぶ学生、広島と原爆をテーマにした身体表現グループに参加するアーティストなどが参加していたほか、現地の実験音楽家やバンドネオン奏者などの音楽関係者からも声をかけていただいた。

写真 3. フェデリコ・デュランド氏とのパフォーマンス風景

写真 4. 終演後、観客との質疑応答

2. ワークショップおよびパフォーマンス

日時：2016 年 3 月 15 日（火）

会場：サンマルティン大学 キャンパス／ UNSAM

出演：安永哲郎＋フェデリコ・デュランド

観客数：ワークショップ 25 名、パフォーマンス 50 名

この日は、国立サンマルティン大学の学生に対するワークショップと、一般参加者向けのパフォーマンスの二部構成で実演を行った。ワークショップでは、先述のレクチャーに続き、音楽理論に縛られることなく「音を注意深く聴く」「音を探索する」という二つのテーマを設定。大学構内を散策しながら周囲の環境音を聴き取り、互いの気づきや意見を述べ合った。その後、各自が持ち寄った楽器や生活用品など、様々な「音の鳴るもの」を用いて、聴き取った音を再現する抽象的な演奏＝「環境音のアンサンブル表現」を実施。わずか 3 時間のワークショップで得られたとは思えないほどの、密度の高い見事なパフォーマンスが展開された。

写真 5. どのような環境音が聞こえたかについて学生とディスカッション

写真 6. 成果発表「環境音のアンサンブル表現」

ワークショップ終了後、一般の観客を招いてのパフォーマンスを同会場にて行った。この日もフェデリコ・デュランド氏との共演による即興演奏だったが、急遽、本来は想定していなかった演出を終盤に実施した。直前のワークショップ参加者の成果発表があまりに素晴らしかったため、筆者の合図に従って客席を立ってハプニング的に演奏に参加してもらえるよう、開演直前に打ち合わせを済ませておいたのである。終演 10 分前、打ち合わせ通りに学生たちに目配せを送ると、各自思い思いに場内を動き回りながら音を奏で始め、一般の観客が圧倒される中、筆者の指揮に従ってパフォーマンスは大団円を迎えた。たった数時間の交流だけで、演奏者全員が一体となって昂揚感と達成感を得られる表現を形にすることができた。この時の参加者とは、その後も SNS 等を通じて互いの表現作品を紹介し合うなどの交流が継続している。

写真 7. フェデリコ・デュランド氏との即興パフォーマンス。この後、学生が演奏に加わった

3. ワークショップ

日時：2016 年 3 月 17 日（木）
会場：ヴィジャ・セラーナ 小学校
実施：安永哲郎、HORNERO MIGRATORIO
参加者数：9 名（小学生 8 名、教師 1 名）

ウルグアイ到着の翌日、首都モンテビデオから北東に車で約 3 時間の丘陵地帯にあるヴィジャ・セラーナに移動し、同地の公立小学校でワークショップを実施した。
本企画は、同国の芸術科学センター GEN のコーディネートにより、現地の美術団体 HORNERO MIGRATORIO（以下 HORNERO～）との共同開催となった。

HORNERO～は、都市から隔絶した地域に暮らすこどもたちを対象にした音楽制作ワークショップを運営している。筆者とは訪問前よりメールを通じた打ち合わせを続け、下記の内容を実施することを決定していた。

・小学校周辺を散策しながら音環境を聴き、録音する
・電子音楽を実演し、こどもたちとともに合奏する
・日本の絵本を読み聞かせ、新たなオノマトペ（擬音語・擬態語）表現を創作する
・後日、録音物を素材にしたオリジナル楽曲を制作する
・一連のプロセスを映像に収め、後日、短編ドキュメンタリーフィルムを制作する

初対面時、小学生たちは筆者が異邦人であることへの緊張と関心を隠しきれない様子だったが、学校周辺の散策活動と昼食を通して親近感を抱いてくれるようになった。特に印象的だったのは、こどもたちからウルグアイ伝承の手遊びを教わり、お返しに日本のこどもが慣れ親しんだ手遊び（アルプス一万尺）を教えたところ、最後まで上達しようと練習していたシーンである。また、持参した絵本（山下洋輔 著「もけら もけら」、駒形克美 著「ごぶごぶ ごぼごぼ」／ともに福音館書店刊）を読み聞かせると、筆者の音読を真似して全員が復唱する場面も見られた。世界でも有数の擬音／擬態表現をもつ日本語に対し、比較的オノマトペを多用しないといわれるスペイン語圏のこどもたちにとって、想像力を掻き立てる体験であったことが、この時の反応からうかがい知ることができた。最後に日本製の文房具（コクヨ カドケシ）と和菓子をプレゼントすると、興味深そうに眺めて持ち帰った。本ワークショップの成果は、HORNERO～との協業を通じて、後日音楽と映像作品として完成させる予定である。

写真 8. 会場となったヴィジャ・セラーナの小学校

写真 9. 野外で音を録音する

写真 10. 絵本の読み聞かせ

写真 11. 現地の手遊びを教わる

写真 12. 広大な丘陵地で周囲の音を聴く

写真 13. 自然発生的に始まったこどもたちとの即興演奏

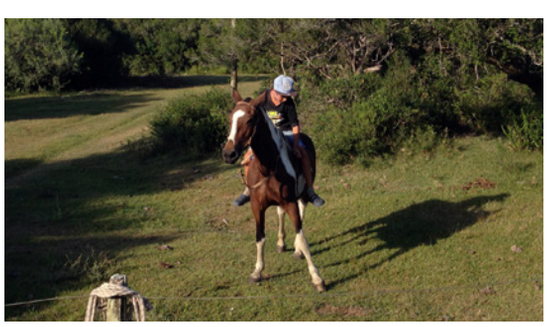

写真 14. 終了後、馬に乗って下校する少年

4. レクチャーおよびパフォーマンス

日時：2016 年 3 月 18 日（金）

会場：ソリス劇場 デルミラ・アグスティーニ・ルーム ／ Sala Delmira Agustini del Teatro Solís

企画タイトル：IMPROV 01

出演：安永哲郎

フアン・カンポドニコ（ベース）、ダニエル・タティータ・マルケス（タンポール）、ルシアノ・スペルヴィエル（ピアノ）、フランシスコ・ラペティーナ（自作楽器）、フアニータ・フェルナンデス（パーカッション）、イグナシオ・ベシーノ（ギター）、ビルヒニア・アリゴン（映像）、ブライアン・マッカーン（映像）

観客数：150 名（前売券完売）

滞在最後の公演は、ウルグアイ国内最古のシアターとして国家文化遺産に登録されているソリス劇場内のホールで開催された。企画タイトルに「IMPROV（即興）01」とある通り、同国でプロとして活躍する初対面の音楽家たちとの即興演奏を行った。それぞれがクラシック、現代音楽、ロック、ポップス、ヒップホップ、タンゴ、カンドンベなど様々な専門性を持ち、使用楽器も音楽言語も異なる七名である。加えて、二名の映像作家が同じく即興で舞台壁面に投影される映像を担当した。パフォーマンスに関する事前打ち合わせは 15 分ほどのリハーサルのみ。満席の聴衆を前に、アルゼンチンと同内容のレクチャーを経て、約 40 分の即興演奏を披露した。各演奏者が持ち味と技術を遺憾なく発揮しながら、抑揚とまとまりのある満足感の高いパフォーマンスを実現することができた。観客の一部からはスタンディングオベーションをいただくなど、大きな反響を得られた。本公演を通じて、初対面の現地音楽家たちとの結束は強固なものとなり、帰国後の今でもコミュニケーションが続いている。また、同国で実験音楽祭を主催している人物にも声をかけていただいた。日本の実験音楽への高い関心を窺い知るとともに、将来の交流音楽祭を視野に入れた対話を交わすことができた。

写真 15. 出演者による終演後のカーテンコール

写真 16. パフォーマンス風景

現地での取材および情報掲載

CHICHES QUE CHIFLAN #12: TETSURO YASUNAGA

KIMONO SAMPLER

El músico experimental japonés dejó un taller, dos shows y una frase: "Mi conocimiento sobre música es casi nulo".

POR JULIO NUSSBO

"Escuchemos sexy ese momento en que un sonido deja de ser audible", admitió Tetsuro Yasunaga en el taller que dio en uno de los impromptos en talleres del Ferrocarril Mitre devenidos auditorios del Campus Migueletes de la Universidad Nacional de San Martín (UNSAM). El músico experimental japonés repasó su carrera y trabajó con los presentes en ejercicios de escucha y reconocimiento de sonido, como uno formulado por el creador de la música concreta, el compositor francés Pierre Schaeffer, en el que cada uno debía mantener una nota cualquiera con su voz concentrándose en no afinar con las ajenas. El workshop concluyó con una composición improvisada colectiva, haciendo uso de cualquier elemento, desde flauta hasta un acordeón.

"Mi conocimiento sobre la música es casi nulo", dice Yasunaga en su hora libre previa a su actuación con el argentino Federico Durand. Si bien el taller abordó la percepción y la ejecución de sonidos no amplificados, el artista mostrando para su performance está abarrotado de pincesadores espaciales, delays, osinoslo, aparatos de loopers, grabadores de cuarto, una suerte de metalófono llamado Zenergy Chimes y una chara con micrófono piezoeléctrico adherido con cinta. "Empecé a usar efectos al querer dar con ciertos sonidos. Con el tiempo no me fueron suficientes y necesité otra cosa, como un sampler, para generar y jugar con copias. Y actualmente, el filtro pasa-grafos Moogerfooger me resulta muy útil, me permite tener control sobre los sonidos agudos."

En su época estudiantil de secundaria, Tetsuro escuchaba cosas nada populares entre los otros chicos, como los alemanes Chaster, que fueron una gran influencia. Al involucrarse cada vez más con trabajos de compositores minimalistas como John Cage o Brian Eno, su obra fue adentrándose en el ambiente, género que años atrás volvió a conocher seguidores con el devenir del drone y bandas como sus coetáneos Boris: "Soy fan, tengo sus discos, aunque no mantengo trato directo con ellos, sino con drone representantes de la escena drone japonesa como Chihiri Harakeyama, que es también amigo de Federico Durand".

La relación con su compañero de performance durante sus dos presentaciones en Buenos Aires –coproducidas por el Centro de Arte Experimental UNSAM y la Embajada del Japón– nació a través del sello japonés Spekk, donde ambos coeditaron. "Nos escribimos y empezamos a mantener una relación cada vez más fluida, así que es genial poder encontrarnos aquí", evaluó Yasunaga, que también organizó el primer show de Juana Molina en Tokio.

Las texturas cálidas de los paisajes que el sujeto genera durante su presentación van transformándose de manera sutil, casi imperceptible, mimetizándose entre sí y con elementos sólidos y otros difusos que llevan al que escucha a un estado de endotoxigenez natural maravillosa.

EL ÚLTIMO GRITO DE MODEX

"CANTAR EN INGLÉS ERA MÁS FÁCIL"

En español y con orquestaciones y arreglos, evolucionan en Ciencia ficción.

POR SANTIAGO RAÚL UNGARO

"Nos cansamos del inglés", dice Gaby Novoa, tercera parte de Modex, el proyecto que completan Martín Ferraza y Juan Camera, todos en voces (ahora en español), sintes y guitarras. Si en su primer disco se volcaron a un electroclash quizás más bailable, su nuevo disco es otra cosa: a su acelerado derrotta bailable le sumaron orquestaciones y arreglos grabados, mezclados y producidos por ellos mismos para un disco excesivo y ambicioso. En una coquetta confitería de Avenida Callao, Gaby enumera influencias no solo musicales: "Este es un disco de ciencia-ficción: Hawkind y Emerson, Lake & Palmer fueron influencias muy fuertes. Pero también nos interesan Magazine, Carl Sagan, Von Dei y Alejandro Jodorowsky".

La flamante producción (que en Chile saldrá por Gara Discos) resulta psicodélica y cancionera, con alusiones a planetas, asteroides y cometas, y momentos sorprendentes como Monaite (cantado por la mexicana Marcela Viejo de Quiero Club) y Amor atómico, con voz de Juliana Bendsky Rodinada por Pablo Harpobar (antes conocido como Gualicho, y quien también toca dyrebe en el disco), la tapa del álbum es un collage de elementos orgánicos y artificiales que coincide con la estética desprejuiciada de la banda: "Cambiamos mucho porque somos muy melómanos: hoy estuve escuchando a Rick Wakeman para después pasar Raimones. No tengo problema con ningún idioma, no tengo prejuicios: así lo que más me molesta es los prejuicios que en la gente: que si cantás en inglés, que si cantás en español, que si tocás tal música o tal otra. Creo que ahora en todo tan universal que cada uno puede hacer lo que tenga ganas, ¿no?", remuebe Gaby.

Editado por el sello español Pias en 2008, ejoca en la que hacían una suerte de post punk bailable, **A Beat Of Everything** estaba íntegramente cantado en inglés: "Un día apareció un tema en inglés y tuvo gustó, y nos abrió puertas afuera: nos interesaba viajar e hicimos tres giras por Europa, estuvimos en España, Alemania, Inglaterra y hasta Rusia; pero en 2008 fuimos a México y ver el Fuerza de cómo trascendía allá la música en español. También volvimos a encontrarle el gusto a cantar en español, porque en inglés es más fácil: creo que a otras bandas como Los Monsters y Utopians también les pasó".

Tantos viajes ayudaron a que la banda cambiara drásticamente, porque la evolución de Modex es innegable y disfrutable: "Haber tocado en Liverpool cantando en inglés y que nos dieran bola fue una experiencia, pero quizá nos dieron bola por pronunciar mal", dice. Y analiza la persistencia de una banda con interna trayectoria pero que aún parece ser más reconocida fuera que dentro: "Hay muchas cosas que logramos por perseverar. Siempre hay algo para hacer: ensayar, componer, tocar, producir o remixar a artistas como Juliana y los Espíritus, Mempoi, Laxial o Cosmo. El disco lo produjimos nosotros y por eso pudimos experimentar durante horas buscando el sonido. Hay que tener el disco en todas las plataformas, aunque la idea es sacarlo en vinilo".

*Viernes 20/3 en Fiesta Invasión, Nicolo Club, Nicolo Vega 5510. A las 24.

JUEVES 04-06 MARZO DE 2009 ■ 3

ブラット・ガイ、債務支払に向け銀行選択を済ます

財務大臣のアルホンソ・ブラット・ガイ氏はホールドアウト（はげたかファンド）に債務の支払いをするための銀行を選択した。

3月30日、債務支払いの合意をコングレソにて行った。

ロイターによるとアルゼンチンの支払いに当たる銀行は次BVA、Citigroup、Deutsche Bank、HSBC、JP Morgan、Santander、スイスのUBS。

彼たち銀巻の利子は年で7.25%、10年で9.7%、30年で9.7%。

沖縄連移民史、いよいよ最終段階へ JICAボランティアの澤さん帰国

マクリ、中国の習近平国家主席と会合へ

安永哲郎氏の実験音楽 サンマルティン大学を舞台に

Menem dice que a su hijo lo mataron

ラサロ・バエスとマネーロンダリング

2016年政治家

巡回マーケット

【アルゼンチン】

- Página/12（インタビュー、撮影）
- らぷらた通信（公演レポート）
- サンマルティン大学 学内誌（インタビュー）

【ウルグアイ】

- 地元紙（公演告知）
- GEN（インタビュー収録／後日公開）

その他、大使館による広報および観客や出演者による各種 SNS 発信（Facebook、Twitter、Instagram）

まとめ

「地球の裏側」と称されることもある南米大陸の二カ国への訪問は、「実験音楽」という特異性の高いテーマとも相まって、事前の反響を想像することが難しいものであった。だが実際に訪れてみると、当初の不安とは裏腹に、幅広い層からの高い関心と深い共感を獲得することができた。これらのリアクションは継続性のある関係性の構築へと発展し、帰国から数日経った現在でも、日常的な挨拶から具体的な共同制作まで、インターネットを通じた様々なコミュニケーションが生まれ続けている。
訪問した二カ国でそれぞれに得られた異なる気づきを挙げるとすれば、アルゼンチンでは感性や美学としての「日本の意識」に対する強い関心を感じた。禅思想や石庭、寺院などの伝統的なイメージと、実験音楽の抽象性との間に何らかの接点を見出そうとする志向がより明確に見られたように思う。一方ウルグアイでは、特定の日本のイメージ以前に、地理的にも文化的にも大きな距離がある中で、相互の価値観や表現方法に共通点があることを興味深く感じるという意見を多く耳にした。伝統と同時代性という二つの側面で「日本から来た私」と「日本の実験音楽」を評価してもらえたことは、美術の批評可能性を拡張する上でも極めて有意義な成果である。今回頂戴したご縁を手がかりに、筆者自身の活動の幅のみならず、実験音楽をはじめとした日本の革新的な芸術領域が広く国際的な認知を高める契機になるよう尽力していきたいと強く感じた。

末筆ながら、本事業の実現に多大なお力添えをいただいた外務省大臣官房広報文化外交戦略課、在アルゼンチン日本国大使館、在ウルグアイ日本国大使館、現地の各機関の皆様に深く感謝を申し上げたい。そして共演したアーティスト、学生、こどもたちには、ともに多様で創造的な未来を育てていこうとエールを送り、本報告を締め括りたい。

写真 17. 機内から臨む南米大陸の朝焼け

【参考リンク】

外務省「日本ブランド発信事業」 http://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/pds/page22_001100.html
安永哲郎事務室 http://www.jimushitsu.com